
きみとまいにち、

kuro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみとまいにち、

【Nコード】

N7908Y

【作者名】

k u r o

【あらすじ】

学園ストーリーです。ある女子高生が男子生徒と出会って、恋や友情をしていくような物語にしたいと思います。

席替え、君との出会い

学校なんか大嫌いだ。

先生「はい、2人組を作って座ってー」

先生はすぐ団体行動をさせようとする。ここで私はいつも孤立する。

休み時間が嫌いだ。

みんなは集まっているのに自分だけ1人だから、周りに自分は1人だと主張しているみたいで嫌だ。

他にもたくさん嫌なことはあった。

嫌なことだったのに・・・。

だったのに・・・

ジリリリリッ ガシャンッ

乱暴にアラームを止める。 まだ眠いながらも私は起き上がる。

朝、5月、今日はいいい天気だ。雲は数える程しかない。

名前は皆川^{みながわめぐみ} 恵^{きたはし}。北橋高校に通う1年だ。

学校で友達なんか出来た試しがない。小学校も中学校も、もちろん今も。

・・・ああ、中学では変な奴が約1名いた。まあ、そんなことは置

いってww

私は1 - 2のクラスの前に立っている。私のクラスだ。

ガラッ

一瞬、クラスのみんながこっちを向く。

そして何もなかったかのようにまたみんなしゃべりだす。

皆はたぶん私に興味がないだろう。その分私も皆に興味が無い。私のことをただの暗い奴としか思っていないだろう。

私はメガネをかけている。目が悪い訳じゃない。前髪や横の髪が顔にすぐく顔にかかってよく表情が見えないと思う。髪を切るお金がないわけじゃない。顔を隠したいのだ。

私の目は少し化粧してるみたいに見えるらしい。（いわば顔が濃いみたいなの・・・）

ただ、それだけで中学のとき先生に早とちりされて入学式の日に怒られた。まあ、怒られた理由は他にあるんだけど・・・。

他に私は衝動的に中学に入学する前にピアス穴を開けていた。左に2つ。親にはちょっと怒られた。

「血が枕について汚れた」とのこと。そっちかよww こっぴどく怒られるよりいいかと思った。

学校では「あいつ、やばいんじゃないか」ってことで避けられた。何で耳に穴開けたぐらいで避けられにやあかんだ。中学にでもなると開けなくなるんじゃないか、と思った。

小学校ではただ単に人との関わり方が分からなかった。1人で遊ぶ

のは楽しかったし、嫌いじゃなかった。そしたら、いつの間にか周りに人がいなかった。

そして、今に至る。

私の席は窓際はしつこの1番うしろだ。私はこの席が好きだ。後ろに誰かいるという重圧感が無く、それに窓から外の景色が見える。空などを見るのは嫌いじゃない。気持ちがとても澄んでいくようになる。その感覚はとても気持ちがいい。

・・・キンコンカーンコン・・・
ガラッ

先生「朝の会はじめっぞー。席つけー。」

今まで各地に固まってしゃべっていたクラスのみんなが散らばる。

先生「今日はー、席替えをしたいと思いまーす。くじは作ってあるからどんどん引いてけー。」

男子生徒「せーんせえー、まだ入学したばかりっすよー。早くないっすかー？」

先生「先生ねー、もうみんなのこと憶えたからいーの。さっさと立って引けー。」

何と横着な・・・みんながもう引き始めているので私も嫌々ながら立ち上がる。クジ箱に手突っ込む。なんでもいいやと思ったのですぐ手についたものを手に取る。

開いてみるとそこには「10」と書いてある。10・・・じゅう・・・あつた！

・・・うわあ。

そこは私が結構嫌いな席。一番後ろなのはいいんだけど、廊下の真横って・・・。廊下には人が通ったり、たまってる人が多いので嫌だ。見られてる感じが嫌だ。

まあ、引いたもんは仕方ないと思い、机を持ってその場所に移動する。隣には見たことあるようなないような男子が座っていた。

???「ああ、隣よろしくね。皆川さん。」

恵「・・・。」

???「えつと・・・？」

私はその人の名前を知らなかった（泣）

恵「ああ・・・えつと、すいません。よろしく・・・。」

???「えつと・・・、川島かわしまたかしです。川島隆。」

通じた！でも結構な恥ずかしさだ・・・。

恵「すいません・・・。皆川です、よろしく・・・。」

すまない気持ちでいっぱいだった。相手の名前を憶えてないなんて・・・。クラスには関わらないと思っていたのがこの始末だ。泣きそう。

先生「よし、全員座ったな！。みんな仲良くしろよ！。」

チャイムが鳴り朝の会が終わる。

隆「あつ！1時間目移動だ。皆川さん、一緒に行きませんか？」
びつくりした。こんなに私と喋る人なんて全然いなかったから。

恵「えつと・・・。」

隆「あ・・・、友達といきますよね。・・・すいません。」

恵「いや、友達いないんで大丈夫です。ホント・・・。」

もうやけくそだ（泣）

隆「・・・ごめんなさい・・・。」

ちよつとやばい（ちよつとじゃないかも）。気まずいし、自分泣きそうだし。

隆「あの、皆川さんってどこ中でしたか？」

恵「光輪こうりん中です。川島くんは？」

相手の名前を呼ぶのがちよつと恥ずかしい感じがした。彼は私より少し背が高い。横に並ぶと、よりそれを実感できた。

隆「安東あんどう中です。光輪から北橋へ来てる人って結構少ないですよ。中学の時は友達みた　いな人、いたんですか？」

恵「えつと・・・。友達じゃないけど普通にしゃべる人ならいたなあ。」

隆「へえ・・・、違う学校なの？」

恵「うん。桐生きりゅう高校だったかな・・・。」

隆「すごいね・・・。俺には無縁だなあ。」

桐生高校は、ここらの地域では結構偏差値の高い学校だ。私には目指す気にならなかった。

その後、ちよつと話が途切れながらも少しずつ話した。話しているうちに敬語だったのが、いつの間にか無くなっていった。

昼休み《皆川》

お弁当だ！

今日は早起きしたので気合を入れて作った。楽しみだ。

男子生徒「おい、たかしー。購買いこうぜー。」
隆「んー、今行くー。」

弁当を出そうとしたとき、

男子生徒「お前さー、何で皆川なんかとずっと一緒にいるんだよー。」

隆「いや、別に。ただ・・・隣になったから？」

男子生徒「皆川には関わらない方がいいって。結構ヤバイことしてるみたいだし。あいつの同中の奴から聞いた。」

隆「ふーん、そうなんだ。」

私はそこにいるのが嫌になった。教室を出て屋上に行った。誰もいなかったのほっとした。私はそこで昼食をとった。

昼、5月、太陽は見えるがちょっと雲が出てきた。

席替え、君との出会い（後書き）

主人公暗くてすみません(;´･ω･) まあ、がんばる！

作業用BGMって作業できませんねww聴きながらがんばって書き
ましたw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7908y/>

きみとまいにち、

2011年11月23日16時51分発行